



小説 愛枝直

挿絵 わつきるみ

MAZOKOI

天然お嬢様は牝奴隷!?

立ち読み版

プロローグ

一章 お嬢様の秘密

二章 ご主人様アウエイキング

三章 背中合わせ／鏡越し

四章 ご主人様アウエイキング(真)

エピローグ

006

009

065

156

187

252

登場人物紹介



ご主人様はわたしをここで
凌辱なするおつもりなのですわっ♡

か が み さ や か
加賀美紗花

容姿端麗で成績優秀ながらも、ちょっと天然気味なお嬢様。密かに被害的な性癖を持っており、自分を拉致監禁レイプして処女を奪ってくれるご主人様を待ち望んでいる。

あ ら の だ い き
新野大樹

大柄で厳つい顔のため、よく不良だと勘違いされる。実際は誰も殴ったことがない優しい性格。

プロローグ

「まあ、どうしてお怪我をなさっている方を怖がらなくてはいけませんの？」

桜色の唇を夢のように綻ばせ、眩い夜空のような瞳をゆつくりと細め、目の前の少女が大樹に答えた。

美しい光彩の中で、傷だらけの自分が呆然としている。みみず腫れの走る頬。擦り切れた額。ぼろぼろに痛めつけられた儼つい顔が、何もかもをありのままに映し出す鏡のような瞳にただ見惚れている。

艶やかな光沢を帯びたハンカチを彼女が広げた。小さな手が顔へと伸びた。柔らかい感触が裂けた口の端を撫でる。見るからに高価そうな白布が赤く汚れる。

「誰もが俺を恐れる」

確かめるような口ぶりで大樹は言った。彼女はおつとりと小首を傾げた。

「もしかして不良さん、ですとか？」

「違う。……………だが、誰も信じない」

まあ、と彼女は驚いた。そして、迷子も泣きやむような優しい笑顔を浮かべる。石くれを乱雑に重ねたようにごつごつした手を、たおやかな手のひらが包んだ。

「信じますわ」



その手のひらのように柔らかく、確かな温もりを備えた声で彼女は言った。

「だって、こんなに綺麗な手をしているんですもの」

そして、そつと手の甲を撫で、まっすぐに大樹を見つめてまた微笑んだ。

その笑顔は瞳を射貫き、心を射貫いた。さんざんに殴られた身体中の痛みを忘れるほどに、大樹の心臓は強く締めつけられた。

風が吹く。彼女の細く柔らかい髪がかすかに揺れる。

新野大樹は名前も知らぬ少女に恋をした。

「ああっご主人ひやま……もお……わたくひ……もお……っ♡」

涙がにじんでぶれてぼやける瞳を必死にご主人様へ向け、紗花は限界を訴えた。

「イキそう、なのか」

「は……はひいッ♡ 淫乱なさやかはしよじよれえぷでアクメしそうなんですうッ♡」

「……分かった」

ご主人様は頷き、またピストンの速度を上げた。

「んぐうッ♡ あっ♡ あううんッ♡ つああああわああ♡」

暴力的なまでの淫悦に紗花はあられもなく悶え狂う。

鋼はがねのような剛直にゴリゴリと挽き潰された処女粘膜はすっかり腫れ上がりこなれてしまっている。どちゅ、ぶちゅ、と重たい水音を響かせ彼が牡肉を出し入れするたび、強烈な媚電が牝褻を走る。赤ちゃんの部屋は、まるで直接殴られたがっているみたいにくっくっ張りと出し、望み通りの荒っぽいノックをゴンゴンと見舞われるたびに、キュンキュンとマゾの悦びに震える。

あまりの喜悅に思考は砕け、紗花は不躰にもご主人様の背中に腕を回してきゅっつと縋りついた。熱く逞しい筋肉の手触り。男らしい汗の香り。赤く指跡の浮かんだ乳肌、彼の胸板でぐにゅりと潰れる。頭の上からケダモノじみた吐息が聞こえた。きつとご主人様も興奮しているのだ。

「……出すぞ。もう離れろ」

まるでその証明のように、ご主人様がかすれた声で言う。紗花は腰裏へ絡めた脚へ反射的に力を込め、

「イヤァ！ 外なんてらめですうっ！」

必死になって駄々をこねた。

「お願いです……中にい……おま○この中にざあめん注いでくだひゃい……きよおは大丈夫なひですからあ……っ」

ご主人様は何も答えなかった。彼はただぐにゆりと奥までペニスを押し込み、深い結合を保ったままぐちぐちと短く速い抽送を見舞い始める。

——射精するおつもりなのだ。紗花のおま○この一番奥で。牝の本能で無言のメッセーヂを感じ取った瞬間——頭の中がざわめく光に満たされた。

「あああイクっ♡ イクうっ♡ ごしゅじんさま、いっしょに♡ いっしょにいいっ♡」
ガタガタと末期の痙攣に牝腰を震わせながら、紗花は必死に懇願する。

「ああ、出すぞ……！！ ……ッオオオ！」

ご主人様は一際強く腰をせり出しドスンと重たい突き込みを繰り返して、子宮口へと鈴口を密着させたままケダモノのような咆哮を上げ——。

びゅぐ！ どぐ！ どぶ！ と、スペルマを撃ち放った。

キーンと耳鳴りがするほどに周囲の音が消え果てる。目の前が真っ白に染まる。全ての感覚が種付けされる膣奥に集約される。



零れ、涙と涎でべちゃべちゃに汚れた見るに堪えないアクメ顔。蕩けきったマゾ壺はぐねぐねと淫猥に蠢いて鋼のような肉肌を舐めしゃぶる。うざったく媚びる牝鬣を振り解くようにご主人様の剛直は暴れ回り、また肉傘をぶくりと膨らませておかわりの子種汁を胎内にひり出す。

「……っ♡ ひっ……っ♡ ……っ♡ ……っ♡」

長々と続いたご主人様の射精が途切れ、中出しアクメが終わる頃には、紗花はだらしく緩みきった牝顔を晒して死にかけた虫のように痙攣するばかりとなっていた。

「……………」

ご主人様はその無様な痴態をじつと見下ろし、半萎えになつてなお逞しい巨棒をずるりと引き抜く。

「あひい……っ♡」

膣肉を捲り返されるような刺激に紗花はみつともない悶声を上げた。開きっぱなしにされてヒクつく牝洞の内壁を春の風が撫で、紗花はその刺激だけでまた軽くアクメする。

あまりにもぎっちりとした牝壺を満たす肉棒に押しつぶされていた尿管が、ここぞとばかりに排液をぶしゃりとしぶく。大量に詰め込まれた精液が子宮から逆流してどろりとこぼれ落ちた。

* * *

大樹ははあはあと荒い息をつき、半裸の肢体をヒクつかせる紗花をただ呆然と見下ろし

ていた。

(やってしまった……)

求められるがまま行為に及んでしまったが、本当にこれでよかったのだろうか？ 今更な後悔が胸に満ちる。

紗花は白濁に汚れる大樹の上着にぐったりと身体を投げ出し、虚ろな瞳を宙に彷徨わせたまま余韻に浸っていた。はだけた乳房は赤く指跡がついてじっとり汗濡れ、がに股に開いた両脚が未だヒクヒクと痙攣している。

どう見たってやりすぎだ。だが、氣遣って動きを止めれば鬼畜扱いされ、興奮に逸って乳房を強く握りすぎればお礼を言われと、何をどうしてもビクンビクンする彼女を見ている内に、だんだんやけっぱちな気分になってきて、思わず求められるまま膣内射精まで極めてしまったのだ。

頭を抱えてうずくまりたい気分をもてあましていると、ふいに彼女が大樹を見上げる。

「ご、ごしゅじんひやま……きねんしやちゅえー……」

呂律が回っていないせいでなんと叫びたかまるで分からない。しばし考え込んで、ああ、記念撮影——と行為前の言葉を思い出し、大樹は古くさい割に小ぎれいな携帯端末を取り出し彼女に向けた。

「び、びしゅ♡」

えへらと緩んだ顔の両隣に型崩れしたVサインをつくった紗花を、慣れない操作に四苦

八苦してパシヤリと一枚写真に収める。収めた後でようやく何をやっているんだと自身に愕然とするが、あえて画像を消す気にはならなかった。まだ妙な興奮が抜けきっていないらしかった。

「さやか、しよじよれえぷでアへ顔だぶるぴーしゅまでさせられちゃいまひた……♡」

その奇天烈な名称のついた破廉恥ポーズを取れたことがよほど嬉しいのか、紗花はまた剥き出しの下腹をヒクヒクさせる。

そして、小さな両手をすぐ側にあつた喉元の首輪へと置き、うっとりとき笑みを浮かべてそれを撫でた。

「これで、わたくひのからだはご主人様のもの……写真をネタにゆすゆすされて、つごいのいーせつくす便器にちよーきよーされてしまうのですね……♡」

ならば心は？ との疑問を大樹はすんでのところで飲み込んだ。

キスより先に繋がることを選び、自分を偽ったのは大樹自身なのだ。そんなことぐらい自分でも分かっている。

（だが——一体俺はこれからどうすれば）

途方に暮れるその顔も大樹はいつもと同じ仏頂面であつた。

有無を言わせぬ調子で告げて、ご主人様がぐちゆりと腰をせり出す。えずきもせず、咳き込みもせず、紗花は喉奥を押し揉まれる虐待にビクンと腹腔を跳ねさせた。その反応を確かめたご主人様は、ぐちゆ、ぐぶ、ねぢ、ごぢゆ、と、激しく腰を振り立て始める。

逞しい牡器が口腔をみっちり満たしてごりごりと乱暴に粘膜を削る。がぼがぼと底の抜けた雨靴で泥道を歩くような音が喉の奥から響く。

「んぐ……お、おご……つぶ……んご……おお……♡」

分厚い両手に頭を押さえつけられた紗花は、ぐったりと脱力したまま激しい抽送を受け入れた。彼の茂みが鼻先をくすぐり、逞しい腹筋が触れるのを感じるたび、じんわりと熱い愉悅が総身を巡った。

(き……気持ちいいよう……♡)

身勝手なほどの口虐を見舞われながら、歓喜の涙をぼろぼろ零す。セーラー服の下で下腹をヒクヒクと緩慢に波打たせ、身の内を蹂躪される悦びに浸る。

気持ちいい。乱暴に口穴を犯されるのが。ぐちゃぐちゃと喉奥を掻き混ぜられるのが。苦しくて惨めでどうしようもないほど興奮してしまう。

ご主人様はまるで紗花をおちんちんを扱く道具だと思っ**て**いるみたい**に**激しく腰を振り立てていた。もうこんなのはフェラチオでもお口せつくすでもない。わたしは今、精液を排泄するお便器に成り下がってご主人様に使われているのだ。気づいた瞬間被虐の淫熱が沸騰して、紗花はまっすぐに降ろしていた手首を反り返らせてわなわなと打ち震える。

「あおおーっ……♡ お……っ♡ ぐうー……っ♡」

ぎゅっと喉を狭め締めつけ、みっともなくぐもった悶え声を零して、ビクビクと便座の上で牝尻を揺すり、紗花は口虐の絶頂に舞い上がった。

（あっ、ああっ♡ アクメしてますうっ♡ わたくし、おくちべんきでアクメしてますのおっ♡）

朦朧とした脳裏に被虐的な感慨が浮かぶ間も、ご主人様は一切お構いなしでゴリゴリとペニスの出し入れを続ける。あまりに酷い扱いに、頭の中で走り回るざわざわが止まらなくなる。訳も分からず鳴き悶えながら、紗花は卑猥にビクビクと身を震わせ続ける。

「こんな真似をされてイっているのか」

まるで神様のお言葉のようにご主人様の問いかけは降り注いだ。強烈な羞恥がこみ上げて、また一段とアクメが深くなる。

ご主人様が怒るのも当然だ。だって普通の女の子はオナホールみたいにお口をおちんちん扱きに使われて気持ちよくなったりしない。やっぱりわたしは生まれついでどうしようもないマゾ牝なのだ。

（でも——）

こんなわたしをご主人様だけが理解してくれる。どうしようもない淫乱マゾの本性を見抜いて、容赦なく虐めてくれる。紗花は僅かでも感謝の気持ちを伝えようと、牡竿に唇を吸いつけ、ねっとり舌を張りつけ、必死になって口唇粘膜を蠢かせた。

「おっ♡ おおっ♡ つぶ、んぐう♡ んぢゅつ、んぐ……っ♡」

下品な淫音をトイレに響かせ、紗花は剛直をしゃぶり立てる。ご主人様のおちんちんはまるでその吸いつきぶりの浅ましさにイライラしているみたいに更に硬くなつていく。

「もう出すぞ」

宣言と共にご主人様は、また一段とピストンのペースを上げた。ぶちゅんぶちゅんと破廉恥な水音を立てて激しく肉棒を突き込まれるごとに、唇の端から溜め込んだ唾液がごぼりと溢れてぼたぼただらしなく垂れ落ちていく。酸欠と苦悶と極上の牝悦の中で陶然としながら、わたしははれるろと肉肌をしゃぶり立てて最後の時を待つ。

そして、ついにご主人様が頭を掴んだ手にぐっと力を込めて、一際強く腰をせり出した。そして喉奥までぐっちゅり深々とペニスをねじ込み――。

「……ッ。イクぞ。……オオ！」

力強い雄叫びと共にビクンビクンと肉棒を脈打たせた。

「んぐうっ！♡ おうーうーっ♡♡♡」

流れ込んでいく。胃の中へ、お腹の底へ、ご主人様のお情けがびゅくびゅくとどろどろと直接に流し込まれていく。

生臭い白濁の香りが口元まで迫り上がって頭の中も真っ白に染まり、紗花はイキ疲れた身体の力を振り絞るようにわなわなとよがり震えた。まるでスペルマを絞るみたいにきゅうきゅうと喉が締まって、その度にご主人様のおちんちんが残り汁を吹き出して、ついに



また触られてもいない肉壺からびちゃびちゃと牝汁が吹き出す。

「んぐ……っ♡ づ……♡ ぐひ……♡ ぐひん♡」

あまりの気持ちよさにもう何も考えられない。わたしは半ば気を失ったまま、スベルマのおかわりをねだるようにもごもごと喉元を蠢かせた。

「今日のご主人様もとっても素敵に鬼畜でしたわ……♡」

傾いた日でオレンジに染まる豪邸をバックに、清楚可憐なお嬢様が囁く。

「そうか」

ほかに何が言えるというのか。自らの欲望に負けた自己嫌悪にうちひしがれる大樹はそう絞り出すのが精一杯だった。

劣情にまかせて彼女の肢体を食ったその後、大樹は彼女を腕で抱いて家まで運んだ。

紗花は鉄柵の門をくぐった後も何度も振り返って手を振った。遠い向こうに立つ屋敷の中へ彼女の姿が消える。大樹はしばらくその場に立ち尽くしたままだった。

本当に広い家だ。大樹の自宅が十軒分は収まりそうな広大な庭に、いくつ部屋があるのか見当も付かないほど大量の窓が並ぶ洋館。改めて彼女が相当なお嬢様なのだ実感する。そして、今更ながらの疑問が胸で膨らむ。そんなお嬢様が一体何故あんな性癖の持ち主になったんだろうと。

(こんな所で考えても仕方のないことだ)

はらりと、『ただの布きれ』が足下に落ちる。紗花はただ呻くことしかできなかった。

一体どうしてしまったんだろう？ 初めて電車に乗った時は人前に肌を晒そうとするなと、紗花をあんなにきつく叱りつけたのに。

不安で、怖くて、それでもどうしようもないほどドキドキして、剥き出しにされた牝穴がきゆうんと疼く。ブルブルとみぞおちに震えが走って、喉の奥が引き攣れ出して、まぶたの裏が沸騰しそうなほど熱くなる。

(ダメ……泣いちやダメです……っ)

必死で自分に言い聞かせ、きつく歯を噛んで口元をたわめる。

彼は、そんな紗花の首元へ、まるでトドメのように、硬く、荒々しく、それでいて滑らかな感触をした親指一本分ほどの太さの何かを巻きつけた。

間違えるわけもない、それは縄だった。

「覚えているぞ。お前の言葉を、何もかも」

彼は紗花の前にかがみ込んだようで、真正面から声が響いた。喉元へと伸びた両手がしゆるしゆるとリズムよく音を鳴らしてその縄を結わえていく。

やがて彼は作業を終えると、また立ち上がり――。

「散歩の時間だ。牝犬」

ぐっと力強く縄を引いた。

ニーソックスに包まれた足が、よろめくように前に出る。彼の靴が芝を踏む音がして、

きゅつと首縄が牽かれる。バランスを取るようにもう片方の足が独りでに前へ出る。

(おさんぽ、させられてます……わたくし、お外で、はだかで、わんちゃんみたいに、お、おさんぽ……っ)

心の中で確かめた瞬間、闇に閉ざされた視界が真っ白に染まるような興奮に襲われた。

初めて犯してもらったあの日、無邪気に語った妄想を、彼は覚えていてくれたのだ。

恥ずかしくて恥ずかしくてたまらないのに悦びが全身を駆け巡って、みっともないほど膝が震えた。まるで叩かれたがっているみたいにくっとお尻が後ろに引けて、ゆらゆらといやらしく揺れた。

きっと誰かに見られてしまう。服を切り刻まれてわんちゃんみたいに引き回されて、今にもアクメしそうなぐらい発情しているマゾ牝の紗花を。きっと誰が見ても分かかってしまう。こんな酷い真似をされて気持ちよくなってしまふ紗花が、一体誰のモノなのかを。

紗花だって本当は分かっているのだ。ご主人様から離れたくないことぐらい。
「……………ぐすっ……………ひっ……………ひっぐ」

紗花は、極端な内股になった足を前に出しながら、切れ切れに嗚咽を零し始めた。

ダメなのに。絶対泣いちゃダメだったのに。必死で自分に言い聞かせても零れ出した涙は止まらない。それどころか堪え性のない自分が情けなくなつて、余計に泣き声が大きくなつてしまう。

鼻の奥がつんと痺れて、まん丸に開いた唇にべたべたと鼻水がこぼれ落ちた。それはギ

ヤグボールから溢れ出す唾液とぐちゃぐちゃに混ざって顎を伝い、胸の谷間を滴って、剥き出しにされたおま○こにまでたどり着いて、染み出る牝汁といっしょくたにぼたぼたと足下の草むらに垂れた。

「ぐうっ……ぐう……っ」

恥ずかしくて、惨めで、なのにそれが気持ちよくて、ガクガクと振り子のように膝が揺れる。ついに立っていることもできなくなって、紗花はその場へへなへなと頰れてしまう。建前と本音が、ココロとカラダが、何もかもがバラバラだった。自分がどこに進めばいいのかも分からなかった。

「ふぐ……ひっぐ……っ」

目隠しの中がぐしゃぐしゃになるほど、後から後から涙が零れる。もう一步だって動けない。汗みずくの肌を震わせながら胎児のように背中を丸めてうずくまる。

——そんな紗花の首繩を、くつと優しく彼が引いた。

「どうした、紗花。こっちだ」

頭の上から、低く落ち着いた声が響く。くい、くい、と励ますようにまた繩が張る。このくびきの先にはご主人様がいるんだ。そう思った瞬間——もう、居ても立ってもいられなくなつた。

「ぐす……ぐう……っ」

紗花は鼻を吸りながら芝生に手をつき、よちよちと四つん這いでまた進み出した。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまめる

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!